

改題

# 土楽たより

どうらく

Kogure 農場 3月号 (NO47)

2014年3月10日(月)発行(毎月10日)

【農暦】いよいよ本番、頑張らねばと思う！

○6日は啓蟄である。最近ではニュースで紹介するので解説は不要と思うが、啓蟄は陽気に誘われて土の中の虫が動き出す頃の意である。日差しは確かに春を感じる。庭の梅の花も8・9分咲きになっているが花が縮んで見える。咲き時期を間違えたのかと思わせる。7日の

朝の畑は霜でうっすらと白い。霜柱も立っている。這い出た虫は凍死してしまう。感覚の鋭い虫たちは這い出る事を間違えなく止めていると思う。天候は気紛れである。いつもながら翻弄されている。晴に遊び、雨だ、寒いだで、畑に出るのをやめる。それでも少しずつだが畑の春の準備は進んでいる。4日に届いた牛糞堆肥を7日にピッコロファームのメンバーの力を得て畑に引き込んだ。8日には堆肥を引き込んだ畑を耕起した。草の緑が目立ち始めている。

露の臺<sup>ふきとう</sup>が出ていた。雪解けの土の中から顔をのぞかせると云うから大分前から出ていたのかも知れない。昨年と比べて雪が多かった分だけ遅い様な気がする。

○最近では体力の衰えと目標の山登り(谷川岳)を考え、意識し歩く様にしており、買い物やコーヒータウンを兼ねてショッピングセンター周りを歩く様にしていた。昨年の今頃は何をしていたのだろうと“土楽だより”を見て、3月初め頃から大堀川への散策をしていた事を知り、今日(10日)は大堀川への散策にコースを変えて見た。風が冷たく身を切る様な寒さで散策を楽しむ雰囲気とは程遠く歩く人もほとんどいない。少しだけ歩いて帰って来た。やはり昨年より寒い様だ。だが、来週はお彼岸である。

○先日のテレビで南米原産のスーパーフード?“キヌア”のことをやっていたと、特異野菜の栽培に興味があったので、ピッコロファームの例会で話題にしたら、Kさんがネット



＜雪が消えた庭の白梅＞梅の花に鶯が来る。残念ながらデジカメでは撮れなかったが、28日撮影



＜廃油で石鱈作り体験＞笠間ごみの会主催の石鱈作りに参加した。多勢の参加があり環境を意識した？時間を共有出来た。13日撮影

で調べ、種を手配してくれた。播種時期は4月の上旬から中旬だと云う。播種が楽しみである。もうすぐ、ジャガイモを植える時期、いよいよ本番、頑張らねばと思う。まてまて、作業能力（除草）を考えろ。同じ事を繰り返してはならないのである。

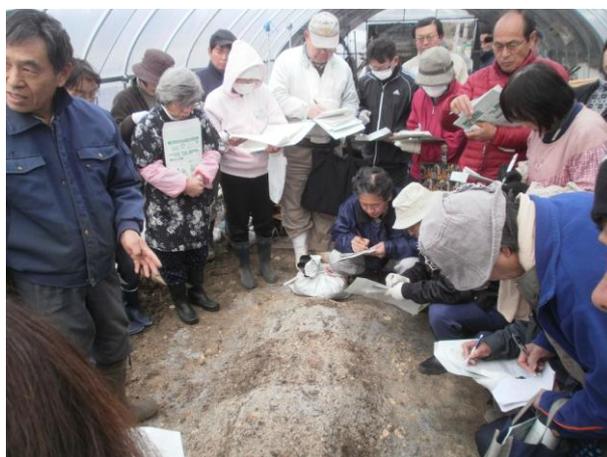
### 【楽農】牛糞堆肥を引き込む！

<ハウス> ; <畑 A> ; 片付けなど少しづつ継続して行った。牛糞堆肥（2t 車 2 台）を畑に引き込み耕起する。

<畑 B> ; 作業なし

### 【楽市】イベント交流・直売など

○その他;・廃油で石鹸作り体験(13日)、ファイナルコンサート(孫の、3日)堆肥講習会(6日)、ピッコロファームの会(7-8日)に参加した。



<堆肥づくり講習会>笠間市土づくり運動推進協会のぼかし堆肥づくりに参加した。多勢の参加者が熱心に。6日撮影

### 【つぶやき=Tweet】「七人の侍」こそが！

○“君に友だちはいない（講談社）”と云う本が東大の学生に人気があるとラジオで聞いた。題名の意味は、一人として同じ人はいない。同じ目的を持った人（同志）とは一緒にやれる。友とは何かやろうとしても建設的関係にしづらいし、ならない。と云う意味らしい。ひとり気儘な自由の時間に憧れ、定年後は農的生活を夢見たが、凡人には自由の時間の使い方は難しい。組織に、仕事に、時間に、長い間縛られて働いて来て、その習性が染みついているのか風雅の文化人にはなれない。その対極の人格なのかも知れない。欲張らず、焦らず、自然体で、働くとは、意外に難しい。農業大事の同志を募り共に働くのが良いのかも知れないが、農業大事の主旨も、具体的な目標を合わせる事は難しい事である。ラジオで話を聞いた時の感想である。

○しばらくしてからショッピングセンターへ行った折に購入した。本屋と云えば昨年9月号の土楽たよりで紹介した“「里山資本主義」（角川書店）”が1位で17万部のベストセラーになっていた。今の社会を憂い考えている仲間がいる様な気がして嬉しかった。横道のついでに、本購入の動機の一つは映画作品が引用されているからである。今は映画鑑賞の機会が少ないが、私にとって映画は趣味以上のものだと思っていたので、強く興味を魅かれた。少し前になるが「清須会議」を、先月には「かぐや姫」を笠間ポレポレホールで見た。清州会議は私一人で、かぐや姫は5人である。たまたまとしても映画館で一人は余りにも寂しい。私のホームページの映画鑑賞のところに“映画を見ましよう”と云う短文をのせている。せめて月一回は見たいと書いている。今でも機会があれば見たいと思っている。横道はこの辺にしておくが、引用映画の一つが、黒沢明監督の代表作で「七人の侍」

である。私には興味深深である。

○ゲマインシャフト（共同体組織）からゲゼルシャフト（機能体組織）の社会へはドイツの社会学者テニースが提唱した概念であるが、説明するまでもないが、ゲマインシャフトは地縁や血縁などで自然発生的に生まれた社会集団の事で、いじめ（村八分）が起こる社会の特性を持つ。ゲゼルシャフトは目的を持った人々がその目的を達成するために集まった社会集団の事である。「君に友だちはいらぬ」には、この考え方の概念が基本になっている様に見える。「三丁目の夕日」は前者の社会で「七人の侍」は後者の社会である。「三丁目の夕日」の時代背景になった60年代の頃、大手企業の社長がこの言葉を使って入社式で訓示を述べたことが話題になった。当時としては、画期的だったからだと思う。

○「三丁目の夕日」の世界には、貧しくとも人々の顔には笑顔があふれ、狭い家ながらも隣近所の人達との温かい交流がある暮らし。今の日本に失われてしまったコミュニティがあった。失われたものの大切さが中高年層の心を捉え、ヒットした。この映画はかつての日本を美化しているが、実はその当時は、かなりの人々にとっては辛い、ときには悲惨とも言える時代だった。金の卵と云われ集団就職した人達のその後の辛い生活は容易に想像できる。と云っている。一方「七人の侍」は盗賊と化した野武士集団のたび重なる襲撃に怯えて暮らす百姓たちが対抗手段として7人のサムライを雇い入れる。性格も出自も様々な7人の侍たちが村を守ると云うストーリーである。チームづくり（仲間作り）の理想形として引用されている。

○日本に稲作をもたらし、農業で生きていくライフスタイルを広めた人たちは、狩猟・採集生活者に比べ圧倒的にベンチャー精神を持つと云い、なぜナショナリストには貧しい人が多いのかの小見出しの中でゲゼルシャフト的な社会により日本がシフトしていくことだと述べている。我々は、ゲゼルシャフト的な社会を育てて来たベンチャー精神を持った日本人の末裔なのである。この本の著者の瀧本哲史は倒産寸前の日本交通を再建したことで知られている人である。読み易い本なので東大生だけの読本にしてはもったいない。購読を勧めたい。

**【後記】最近、面白い本との出会いが多く。本の話ばかりですが、是非読んで欲しい。来週はお彼岸です。春本番です。笠間に、kogure農場にお越し下さい。**

**【特に編集せずランダムな構成にします】**



**<ベリーダンス>アンチエイジングの身体は魅惑的？。笠間への移動の途中で。22日撮影**

発行者；Kogure農場・小暮虎雄

住所；笠間市本戸4201-10

携帯電話；090-9333-4135

メール；[torao-k@nifty.ne.jp](mailto:torao-k@nifty.ne.jp)

HP；<http://homepage3.nifty.com/toragigi/>